

私見・ライブドア

(3つの視点)

先月初旬、ライブドアが立会外取引でニッポン放送の株式35%取得して筆頭株主となった、という事実が公表されて以降今日に至る迄のライブドアとフジTV・ニッポン放送との激しいバトルは、資本市場だけでなくマスコミにも格好の話題を提供した。連日この話題が様々なメディアで報じられ、ライブドアの行動の是非を巡る議論が沸騰している。

この問題の帰趨が定かでないこの時期に、私如きが意見を差し挟むことに抵抗を覚えると思うが、しばしお付き合い下さい。

このライブドア問題に対し、「今は、乱世か」というのが私の第一の視点である。

昔から歴史小説やNHKの大河ドラマ等に比較的好く接してきたが、私の感覚ではその8割が戦国と幕末に題材をとった小説やドラマだったと思う。その時代が圧倒的に面白いからそうなるのだが、その主因は「若者たちの活躍」にあると考えてきた。世の中が大きく変わる時を乱世と呼べば、乱世に出て来て世の中を動かすのはいつも決まって若者である。どこまでが若者か議論があるが、私が属する年代ではないことは確かなことである。

今、時代は高度工業社会から知識社会への大きな転換期にあると云われる。もし本当にそうであれば、当然にして時代を動かす無名の若者達が次々と出てくる筈である。ライブドアの堀江さんはその1人かもしれない。かつて、ソフトバンクの孫さんを現代の織田信長に擬したことがあるが、なんだかすっかり丸くなってしまった。だからこそ堀江さんに注目したい。

第二は「新しい市場の覇者を巡る戦い」という視点で見る必要があると思う。

昨年9月、消費者向け電子商取引市場規模の推移をご案内したが、99年に3千億円規模だった市場は2003年には4.4兆円規模に膨らんだ。たった4年で14倍に拡大した訳であるが、それでもまだ全体の1.6%に過ぎない。これからこの市場が何処まで膨らむかは予測するのは難しいが、実感からしてかなりの勢いで拡大してゆくのは間違いない。その市場は既存市場を奪って成

長する市場で既存企業にとって脅威そのものであるが、その成長市場を巡る熾烈な戦いが今正に展開されていると見ることができる。一步先を行くのはヤフーであり楽天であるかもしれないが、戦いは始まったばかりだ。ライブドアが資本のねじれを放置していたフジサンケイGに狙いを定め、同グループを傘下に納めるべく動いたのは、先行組に追いつき追い越そうという意志の現れではないだろうか。

連結売上300億円のライブドアが800億円の借金をしてフジサンケイGに買収をかける。人生を賭けた堀江さんがその先に何を見ているか解らないが、巨大市場の覇者たらんとしていることだけは確かなことではないだろうか。

第三の視点は、今盛んに議論されている資本市場・株式市場に関する視点である。

ライブドアの株式取得経緯が批判され法改正に至ろうとしているが、そもそも立会外取引を最も便利に使ってきたのは既存大企業である。ライブドアは、少なくともその時点でルールに則って行動した。ルールを適正化してゆくのは必要だが、ルールに則った行為が非難されるのは筋違いである。むしろ問題にしなければならぬのは、ルールを歪めるニッポン放送のフジTVに付与する新株予約権である。こんな防衛策が許されるならば、日本の株式市場に対する信頼性は大きく低下してしまう。

私は従来からライブドアの株式市場での行動を「太え野郎だ」と思ってきた。株主を愚弄する行動と思ったのだ。その見方は今も変わらないが、市場には目に見えないが「もっと太え野郎」がいることが分かった。だからこそ、日本市場の時計の針を逆戻りさせてはならない。

それにしても一連のTV報道を見ていて思い感じたことがある。巨大メディアのトップは何で皆あんな風貌なのだろうか。NHKの会長、読売Gオーナー、そしてフジTVの会長。勿論、人を見かけで判断してはいけないとは承知しているが、見かけで判断したくなるような顔つきをしている。社内の勢力争いや政治筋との駆け引きに浮き身をやつしてきたからだろうか。

それに比べれば「ホリエモン」は未だそんなに汚れていないように見える。それが彼の最も強力で有効な武器である。この若者だけが持つことのできる武器で思う存分戦って欲しい。